

「正義」の成立

ソクラテスに遡る倫理学は、「徳」（よさ、アレテー）の追究。「徳」として追究されるのは、節制・勇気・知恵・正義。「正義」は徳の最上位に置かれ、プラトンの対話篇などで盛んに論じられた。アリストテレスに至る「正義」の流れをたどる

1 「よさ」（徳）の追究

○ソクラテス

「正義」は定義されないものの、正不正は明確に区別される。対話では、「強者の利益」を正義として主張する相手を論破するとともに、不正を行うことと不正を受けることのどちらの害がより小さいかを論じて、後者を選ぶ。刑死の運命を予告する。→①

○プラトン

ソクラテスの死から、正義を個人の徳としてだけでなく、正しい行いが抹殺されることのない理想社会のあり方を考えようとする。正義は、個人と共同体（国家）にまたがる徳として追究され、究極の「善のアイデア」を認識する哲人王の支配をうちだす。→②

○アリストテレス

「理想国」の実現が見込まれない現実に対応して、倫理をいかに実現するかを問題にしなければならない（倫理学から政治学へ）。→③ 法によって社会を統治するための枠組として、交換物の価値を平等にするという原則（交換的正義）に加えて、正義を「配分的正義」「是正的正義」の二種に分類する

- ・配分的正義：「各人にはそれぞれの価値（能力）に応じて財貨（富、名誉、地位など）を配分すべし」とする、「幾何学的な比例関係」にもとづく平等。
- ・是正的正義：「加害に対する弁償のような、破壊された原初の状態の復元を目指す場合」。利害と得失を是正して、「算術的な比例関係」を維持すること。

2 正義の変容

正義の起源は、「秤る」（pensare）こと（ベルクソン）——商品と商品の価値を釣り合わせる「等価交換」の原則。→④ 相手から受けた仕打ちに匹敵する反撃で応じる報復や報償が、古来の正義——「目には目を、歯には歯を」（旧約聖書）。

「右の頬を打たれたら、左の頬を差し出せ」（新約聖書）への変化は、「閉じた道徳」から「開いた道徳」への「愛の飛躍」。ソクラテスの死が歴史を変えた。→⑤

[資料]

① ソクラテスの運命

「今もし誰かが、あなたを…逮捕して、何も悪いことはしていないのに、しているのだとして、牢獄へ引っ張っていくのだとしてごらん。……法廷へ出頭したなら、あなたを訴えた告発人が、実につまらない、やくざな人間であったとしても、もしその男があなたに死刑を求刑しようと思えば、あなたは死刑になってしまうだろうからね。とはいえ、ソクラテスよ、どうしてそんなものが、知恵の名に値するといえるだろうか」(プラトン『ゴルギアス』加来彰俊訳、岩波文庫、2007年、143頁)。

② 支配者の任務

「最後の目標…それはつまりこれらの人々[国家の支配者]をして、魂の眼光を上方に向けさせて、すべてのものに光を与えているかのものを、直接しっかりと注視させるということだ。そして彼らがそのようにして〈善〉そのものを見てとったならば、その〈善〉を範型(模範)として用いながら、各人が順番に国家と個々人と自分自身とを秩序づける仕事のうちに、残りの生涯を過ごすように強制しなければならない」(プラトン『国家』(下)藤沢令夫訳、岩波文庫、1979年、162-3頁)。

③ 倫理学から政治学へ

「(政治学の)目的こそ「人間にとっての善」であるということになるろう。なぜなら、たとえ個人にとっての目的とポリスにとっての目的が同じものであるにせよ、ポリスの目的を獲得し、それを保全することの方が、より重要でより完全なものであると思われるからである。……/こうして、この探究は以上の事柄を目指しており、それは一種の政治学である」(アリストテレス『ニコマコス倫理学』神崎 繁訳[アリストテレス全集4]、岩波書店、2014年、20頁)。

④ 正義の起源

「正義はかつては天秤によって表現されていた。…算術・幾何学への関連が正義を特性づけており、このことはこの概念の歴史を一貫している」(ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』森口美都男訳、中公バックス[世界の名著64]、1979年、281頁)。

⑤ ソクラテスの遺産

「ソクラテスの教えには、いつも反語^{イロニー}がつき従っており、熱情^{リリスム}の爆発はたしかに稀だった。しかしこの爆発が新しい精神に道を開いた限りにおいて、それは人類の将来を決定する意義のものだったのである」(同書 275-6頁)。

「正義」の成立

1 「よさ」(徳)の追究

ナイフの「よさ」(アレテー)はよく切れること。人がよくあるとは、「幸福」。人に備わるべき「よさ」つまり「徳」は、節制・勇気・知恵・正義。四徳の中での最上位は「正義」。ソクラテスに始まる徳の探究が、プラトンを経て、アリストテレスの倫理学に実を結ぶ。

○ソクラテス：「正義」を論じて、それが「強者の利益」であるとの主張を論破した——その主張は、古今に普遍的(プーチンのロシア、トランプのアメリカを見よ)。さらに、不正を行うことの害と不正を受けることの害を比較して、後者の害がより小さいとの結論を引き出す。①——不正に対して不正で報いなかったその生き方(刑死の運命)を予告する。

○プラトン：ソクラテスの死を若年時に体験。政治家として生きる道を探ったが、断念。哲学者として、〈正しい行いが不正によって葬られることのない〉社会、理想国家の建設を構想した。②——哲学を土台として、徳と教養のすべてを修めたエリート(複数)が、「最後の目標」として、〈善〉のアイデアを認識しつつ、国家の守護にあたるべしとする。

○アリストテレス：〈善〉のアイデアにもとづく理想国家のプランは、非現実的。③——善悪の中間に位置する人々を治めるための現実的な「正義」のあり方を、政治学のテーマとして考えた。人々が納得して従う正義として、「交換的正義」のほか二種の平等を具体化した。「配分的正義」は、各自の立場・能力に応じた配分比を実現するもので、機械的な分配を意味しない。「各人における価値(能力)とそれに応じた財貨の取得量の比率が等しい。ということ」「冷厳な能力主義の正義論で、以後長くヨーロッパの思想に影響を及ぼした」(『岩波哲学・思想事典』)。

2 正義の変容

正義を形づくる「平等」とは、価値を秤って釣り合わせること。報復・報償は、行われたことに対して等しい価値をもって応える、相互性(=因果応報)を意味する。④——基本的に「閉じた社会」である国家において、つねに報復・報償の相互性が支配する。

歴史上、不正な仕打ちに不正をもって応えなかった事例が二つある。イエスの磔刑とソクラテスの刑死。二つの「開いた魂」が、それまでの応報的な正義のあり方を変え、「赦し」や「和解」へと道を開いた。→⑤ だが、それで「開いた社会」が実現したわけではなく、「血で血を洗う」しきたりは残り続けるにしても、それを「正義」とすることを一概に是としないのは、閉じたものを開いた過去の事績によってである。

Cf. 卒業式の祝辞